

19世紀末における漢学と「支那哲学」
——服部宇之吉の学問的可能性と清国留学への道程——

水野 博太

はじめに

本稿は、服部宇之吉（1867–1939）が明治 20（1887）年に帝国大学文科大学哲学学科に入学してから、明治 32（1899）年に東京帝国大学文科大学において漢学・支那哲学⁽¹⁾を担当すべき教授候補として文部省外国留学生に選抜されて清国留学へと出発するまで⁽²⁾の間における彼の学問的特徴について分析する。併せて当時の留学生派遣制度並びに選抜の具体的な状況について検討し、服部が留学生として選抜された経緯及び要因について明らかにしたい。

本稿が主な分析対象とする服部宇之吉は、明治末期から昭和初期にかけて日本における漢学・支那哲学界の中核的存在であり、大学出身者としては初めて東京帝国大学文科大学における漢学・支那哲学分野の教授を務めた人物である⁽³⁾。服部の関心は単に中国古典学としての漢学・支那哲学のみならず、同時代的存在としての中国にも及んだ。すなわち服部は、学術的な側面からは「孔子教」⁽⁴⁾論などによって「官学アカデミズムと護教的教学体制の維持拡張に」「才腕」を発揮し⁽⁵⁾、また対支文化事業（東方文化事業）委員や東方文化学院理事長などを歴任することによって政府の対中国政策にも力を尽くした。そのような意味で服部は戦前における「典型的なシノロジスト」⁽⁶⁾（支那学者）と呼びうる人物であった。

服部が上記のような経緯を歩み始めた転機のひとつとなったのは、明治 32（1899）年から明治 35（1902）年にかけての清国及びドイツへの留学であった。服部は明治 32（1899）年 3 月に東京帝国大学文科大学の講師を嘱託されると、5 月には助教授となり、同時に教授候補として 4 年間の留学命令を受けた⁽⁷⁾。それまで文部省官僚、師範学校教授、文部大臣秘書官などを歴任していた服部は、これ以降初めて「大学」の中を具体的に歩むことになる。

後述するとおり、服部は学生時代から既に漢学・支那哲学に強い関心を抱いていたと思われるのであるが、同時代に存在する国家あるいは社会としての中国に接点を持ち、また関心を実際に示し始めたのは、この留学以降であった。明治 35（1902）年、服部は留学先のドイツから帰国すると直ちに清国へと再出発し、明治 42（1909）年まで北京の京師大学堂において正教習⁽⁸⁾として教鞭を執った。同時に服部は同国の社会・行政諸制度について研究を進め、その成果として明治 38（1905）年には清の行政制度を概説した『清国通考』を、明治 41（1908）年には

『北京誌』を著した。これらの時期に蓄えられた知識・経験が、服部が「シノロジスト」として活動するための基礎となったことは疑い得ない。

しかしながら、服部がなぜ留学という転機を迎えられたのか、すなわち、なぜ他でもない服部が東京帝国大学における漢学・支那哲学の教授候補として選抜されたのかについては、これまでの研究では必ずしも明らかにされてはこなかった。と言うよりも、この問いに対しては既にいくつかの定型的な「解答」が用意されているために、これまであまり疑問視されてこなかったと言った方が適切であるかもしれない。

例えば、服部自身は最晩年の回想で「外山〔正一：引用者、以下同様〕先生と濱尾〔新〕先生及び東京高等師範学校長矢田部良吉氏との話合が段々進んで、自分を東京帝国大学の教授として漢学を担任せしむる為め支那に留学させようといふことの議が追々に熟した結果である」⁽⁹⁾と述べている。これは、服部の選抜については、外山正一・濱尾新・矢田部良吉らとの人脈が一定の役割を果たしたことをうかがわせるものである。また、東京大学の「正史」とも言うべき『東京大学百年史』においては「洋学を兼修した基礎のうえに、中国古典学を新たに建設させようとする文教幹部の意図がはたらいていた」⁽¹⁰⁾と述べられている。「文教幹部」が上述の濱尾・外山らを指すのかは定かではないが、この記述からは、同じ東京帝国大学文科大学であっても漢学科出身者ではなく哲学科出身の服部に対してこそ、旧来の「漢学」を脱して新しい「中国古典学」を「建設」させる期待が掛けられていたことが、その選抜の要因のひとつであったことがうかがえる。

しかしこれらの説明によっても、なお若干の疑問は拭い得ない。例えば、服部の選抜が外山・濱尾らの推薦によるものであるとすれば、なぜ彼らは他でもない服部を選んだのであろうか。服部が西洋哲学と漢学・支那哲学を兼修した人材であったことは確かではあるが、では同時期に同様の人材は他に存在しなかったのだろうか。存在したのだとすれば、服部が選ばれ、彼（ら）が選ばれなかった理由はどこにあったのだろうか。

このような問いに対する解答を準備するためには、まず同時期、すなわち初期服部の学問的特徴について明らかにしつつ、加えて同時期の留学制度及び具体的な留学生選抜の状況についても検討を加える必要があり、それらの考察を経て初めて、なぜ服部が東京帝国大学における漢学・支那哲学の教授候補として選抜されたのが明らかになると考えられる。まずは初期服部の学問的特徴について、同時期の著作（著書及び論文・寄稿など）の具体的な内容の分析を通じて明らかにしていくことにする。

第1章：初期服部宇之吉の学問的特徴

(1) 初期服部宇之吉における西洋哲学と漢学・支那哲学

同時代のほぼ全ての知識人がそうであったように、服部もまた幼少期より濃密な漢文教育を施された。服部最晩年の回想「服部先生自叙」⁽¹¹⁾によれば、服部宇之吉が二本松から上京したのは明治6(1873)年であり、養父が「麻布区六本木町の藩邸」⁽¹²⁾に職を得たのを契機とし、同藩邸内に居を定めたという。初めは「岡寿考」なる漢学者の塾⁽¹³⁾に入門して「四書の素読」を学んでいたが、明治9(1876)年に麻布小学校が新設されるとその岡塾に通いつつ小学校にも入学し、いわばダブルスクールの状態が続いたようである。飛び級を繰り返して小学校を4年で卒業すると、明治12(1879)年から翌年にかけては私塾で漢学・数学・英語を学習し⁽¹⁴⁾、明治14(1881)年に共立学校に入学、明治16(1883)年には大学予備門へと進学した。ちょうど制度の改定期に当たった服部は、予備門での3年間に加えて更に1年間を第一高等中学校生徒として過ごさねばならず、明治20(1887)年ようやく帝国大学に入学した。この翌年、すなわち大学2年次から生涯にわたり、服部は継続して世に著作を発表し続けることになる。

服部の著作一覧は、死後『漢学会雑誌』に掲載された「服部先生追悼録」中の「服部先生著述目録」によって知ることができる⁽¹⁵⁾。いまそれを補完しつつ、同時期の著作を年代順に一覧化すると、表1(文末)のようになる。

一見して気付くのは、まず西洋哲学を論じたと思われる著作が意外に少ないことであり、また帰国後に精力的に取り組んだ「孔子教」はもとより儒学関連と思われる著作もほとんど見当たらないことである。

「西洋哲学の組織的な研究法をもって、中国哲学に新生面を拓いた」⁽¹⁶⁾と評される服部ではあるが、西洋哲学を論じた著作は大学在学中と卒業後のごくわずかな時期にしか見られず、加えてそれらの多くは学説あるいは哲学史の概説であって、専門的な論考はほぼないと言ってよい。例えば明治22(1889)年の「純正哲学ノ本領」は、哲学の存在意義は「理学〔科学〕ヲ総合シテ」「以テ万有全体ヲ通観シ得セシムル」⁽¹⁷⁾とあると述べた(科学万能論に対する)哲学擁護論である。同年の「降神術ノ話」は、当代のアメリカで流行していたスピリチュアリズム(服部は、ここではSpiritualismの訳語として「降神術」を用いている)の現況についての解説であり、その契機となったフォックス姉妹のエピソードについて詳しく語られているものの、それ以上のものではない。「ソクラテスの哲学」及び「ソクラテス」は、同哲学者に関するやや詳細な論考ではあるが、「ソ氏の伝」という副題が示すとおり、伝記の域を出るものとは言い難い。「原始信仰の梗概」ではカント、フィヒテ、シュライアマハーなどによる宗教の定義の紹

介から始まって「宗教運動の順序」について述べ⁽¹⁸⁾、その「第一期」としての「拝物教 (Fetichism)」について論じているものの、未完のまま終了している。また「希臘哲学即古代哲学」は、古代哲学が「ソクラテス前の哲学」「ソクラテス流の哲学」「アリストートル [アリストテレス] 後の哲学」に分かれることについて述べているが、わずか1ページ余りで前者同様に未完となった⁽¹⁹⁾。

哲学科の学生あるいは卒業生として、西洋哲学、特に古代ギリシア哲学に強い関心を持っていたと考えられる服部ではあるが、ほどなくその関心は古代ギリシアからもうひとつの「古代」へと移ってゆくことになる。その関心の対象こそが漢学・支那哲学であり、とりわけ諸子学であった⁽²⁰⁾。以下、順に各著作について簡単にその内容を見ていくと、まず文科大学在学中の明治 21 (1888) 年に「列子学説一斑」を『哲学会雑誌』(のち『哲学雑誌』と改名)に発表し、列子の「年代」及び「伝統」について他の漢籍に徴した考証を、またその「万有原始論」及び「精神論」について考察を加え、簡潔ではあるが「へらくりたす [ヘラクレイトス]」及び「あいをにあん物理学派 [イオニア学派]」との比較を行った⁽²¹⁾。また明治 24 (1891) 年から翌年にかけて、服部は雑誌『支那文学』⁽²²⁾内において「支那文学講義・諸子門」の『老子』担当として連載を持ち、同書の解題及び第 1 章から少なくとも第 14 章までの各章に注解を加えた。

参考として引用する注釈としては、河上公章句・王弼注のほかには南宋の林希逸⁽²³⁾のものが多く(第 1・3・4・5・6・10・11 章)、また『淮南子』『荘子』などの本文及び注釈も用いている(第 5・6・10・12 章)。ただし冒頭にはフィヒテとヘーゲルが引用され、また第 2 章「天下皆知美之為美、斯惡已。皆知善之為善、斯不善已。」の解釈に当たっては「美」と「善」に着目して「真理界、事実界、及価値界」の区別について言及しており⁽²⁴⁾、服部が未だ西洋哲学と漢学・支那哲学との比較を念頭において研究を進めていたことを示すものと言える。

しかし明治 29 (1896) 年の「墨子年代考」及び「荀子年代考」の頃になると、西洋哲学者の名前は一切登場しなくなる。「年代考」という名の示すとおり、両論文は墨子及び荀子の活動年代などについて考証を行ったものであるが、いずれにおいても漢籍に照らして漢籍を考察するという手法が執られている⁽²⁵⁾。大日本教育界における講演に基づく「習字に就きて」では、服部は教育における「習字」の役割について「文字の形の觀念を明確にすると云ふのが第一の目的であらうと思ふ」⁽²⁶⁾という結論に至るのだが、その結論を導くに当たって許慎の『説文解字』に基づき「支那の文字の性質」⁽²⁷⁾である「六書」について概説している。明治 31 (1898) 年の「詩書に見えたる天に就きて」では、その名のとおり『詩経』及び『尚書』(書経)に登場する「天」観について整理し、特に天人相関について詳しく論じている⁽²⁸⁾。明治 32 (1899) 年の「孟子闢異端弁」では再び諸

子学に戻り、孟子の「關」いた「異端」、つまり「楊墨二子についての学」⁽²⁹⁾について『荀子』を交えつつ論じた。

こうした著作の特徴を鑑みると、服部は文科大学在学中から留学直前まで一貫して漢学・支那哲学、特に諸子学に関心を示し続けていた一方で、西洋哲学は、在学中及び卒業直後の一部の時期を除けば、それは具体的な著作の表層には現れてこない、あくまでも思考の補助線となるに留まったとすることができる。

(2) 『倫理学』一垣間見える「儒教倫理」と未だ見えない「孔子教」

前節で取り上げた著作群とはやや性質の異なるものとして、服部が第三高等中学校教授時代から高等師範学校教授時代にかけて執筆した『中等論理学』『心理学』『倫理学』などが挙げられる⁽³⁰⁾。これらの中で特に注目すべきものは『倫理学』である。同書は初め明治29(1896)年に金港堂書籍より「教員文庫」シリーズの一書として刊行されたが、明治32(1899)年10月には改訂版が同社から出版され、また明治33(1900)年3月には「師範学校修身科用教科書」として文部省の検定を受けている⁽³¹⁾。なお同書は西洋哲学の一部としての「倫理学」を専門的に論じたものではなく、中等教育における倫理・修身科教授の参考書として書かれたものであったため、同書における西洋哲学への言及は極めて限定的である。

同書は明治23(1890)年の教育勅語渙発後に刊行された、広く「儒教倫理」と呼ぶべきものに基づいて執筆された倫理・修身科教科書群の中に位置づけることができようが、更に同書の特徴としては、個別の倫理徳目の紹介に際して、具体例として中国古典を豊富に引用している点が挙げられる。例えば、倫理・修身「教育の理想的目的」とされる「道徳的品性」及び「成徳」は『荀子』勸学篇の「徳操」を引いて説明され⁽³²⁾、また「人道」及び「人性」については『孟子』『中庸』『淮南子』『尚書』などを引用しつつ「人道(人倫)は人の天性に本づき循ふもの〔傍点筆者〕」⁽³³⁾と述べている。また実践倫理としての「孝」は『礼記』祭義篇及び『孝経』を用いて説かれ⁽³⁴⁾、「夫婦の道は人道の本」であることが「詩経三百篇、関雎を以て始む」ことにより示される⁽³⁵⁾。同書を締め括る言葉は『孟子』の「道在爾、而求諸遠」である⁽³⁶⁾。

一方で「本邦現行の」修身教育について、「多くは論語中庸の類を講ずるのみ」であり「徒に聖經賢伝に拘泥し字義章句の間に全力を費し」ているため「漢学者流の人をして倫理科を教授せしむるに就きては、特に注意せざるべからざる所なり」⁽³⁷⁾との「漢学者」批判が見える点にも注意したい⁽³⁸⁾。ここからは、服部にとって倫理・修身科における漢学・支那哲学あるいはひろく漢籍と呼ぶべきものは、あくまでも「徳を磨き身を修むるの方便」⁽³⁹⁾のひとつであり、また服部

が自身を必ずしも純然たる「漢学者」とは見做していなかったことがうかがえる。短期間ではあるが文部省で教育行政に携わり、その後も第三高等学校及び高等師範学校で教鞭を執っていた服部は、「聖經賢伝」の「字義章句」解釈の専門的「漢学者」である以前に、総合的「教育者」であるというアイデンティティを早くから有していたとも考えられ、これは後年の服部の活動を考える上でも重要な視点になると思われる。

さて、その内容面について言えば、同書において説かれる「倫理」は、後年の服部における「孔子教」の言説に近いものがあるとは言えるものの、それは中国古典、とりわけ「教育勅語」においてその「倫理」としての正統性を認められた儒学を基礎に据えて倫理・修身道徳を説く以上は避け難く生じる類似性の範囲を出るものとは考えられず、孔子の「人格」を集中的に取り上げて論じた後年の「孔子教」論⁽⁴⁰⁾とは未だ一線を画している。同書に『論語』からの引用がないわけではないが、上記のとおり引用文献は多岐にわたっており、孔子それ自体への特別な注目は認められない。

(3) 服部と島田篁村における諸子学の位置づけ——「通史」の基礎としての諸子学

既に井上哲次郎が早くに指摘しているように⁽⁴¹⁾、服部の学問形成に、帝国大学在学中に漢学科教授として「漢文学」及び「支那哲学」を講じた島田篁村（1838-1898）の強い影響があったことは確実であろう。島田は「日本の経学研究に清朝考証学を本格的に導入した最初の人」⁽⁴²⁾ともされるように、その師であり校勘学・考証学を能くした海保漁村（1798-1866）の姿勢を敬承して実証的な学風を形成していた⁽⁴³⁾。その学風は、西洋学術の受容と伝授という使命を帯びた近代的学術機関である東京大学においても、島田が「清代樸学の方法を学科指導の基礎にすえた」⁽⁴⁴⁾ことで受け継がれた。上記の著作内容と併せて考えると、初期の服部は島田と同じく考証学に由来した実証的な姿勢を保ちつつ、その主たる関心は経学ではなく諸子学に向いていたと言える。服部は確かに哲学科出身ではあるが——あるいは「実証」性を重んじる西洋近代学術としての西洋哲学を学んだ哲学科出身であればこそと言うべきであろうか——、その学風は海保、島田と続く伝統的「漢学者」のそれを継ぐものであった。

では、服部が継いだ島田の学風とは具体的にはどのようなものだったのだろうか。明治10（1877）年の東京大学の創設以来、教授陣のなかでは唯一と言ってよい「考証学」系統の漢学者であった島田の学風は、上記のように考証学に由来する実証的なものであったと言うことができようが、その著作は決して多くはな

く、体系的な作品を残すことなく世を去った。島田の学問は『哲学雑誌』『東京学士会院雑誌』などに発表された論文や講演録のほか、死後 20 年を経過した大正 7 (1918) 年によろやく刊行された『篁村遺稿』などにその一斑をうかがい知れるのみである。

しかしながら、その断片的な著作群の背後には、通時代的な「漢学史」編纂の意図があったことが指摘されている。すなわち町田三郎によれば、塩谷時敏の墓碑銘⁽⁴⁵⁾や安井小太郎の文章から、島田は「漢土歴代及我朝学統源流」について「歴代学案」の編纂を意図し、門弟のノート（「生徒伝相割記」）の段階までは至っていたことが分かり、また「与黎蕪齋書」⁽⁴⁶⁾において「弊邦文献之略」すなわち日本漢学について上古から徳川期に至る小史を伝えているが、これは「明治における自覚的な「漢学史」研究の嚆矢をなすものであった」という⁽⁴⁷⁾。

このような島田の「歴代学案」編纂の意図は、その残された著作の端々からも見て取ることができる。島田は明治 22 (1889) 年に「本朝儒学源流考」を、明治 28 (1895) 年には「清儒学案」を、明治 29 (1896) 年には「本朝諸儒の経説を評す」を、明治 30 (1897) 年には「本朝古代の経学と唐代の学制」を発表しており、これらの著作からは、儒学においては基本的には中国が先進であったという事実を前提としながらも、日本儒学の再評価を目指すという島田の意思がうかがえる⁽⁴⁸⁾。

儒学を中心に「歴代学案」編纂を意図していた島田ではあるが、同時に諸子学についても注意を払っていた。島田は明治 25 (1892) 年から翌年にかけて『哲学雑誌』に『韓非子』『荀子』『列子』『莊子』の「解題」を発表している。更にその直後には、同じく『哲学雑誌』に「鬻子」「関尹子」「鬼谷子」といった道家の諸子について『文献通考』『宋学士全集』『四庫全書総目提要』などからの抜粋が「解題」として無記名で掲載されている（表 2）。後者については必ずしも島田の手によるものとは断定できないが、少なくとも島田が同稿に目を通した可能性は高く、またこれらの道家諸子も島田の関心の射程内にあったとすることができよう。

島田が、諸子学を自分の学問体系の中にどのように位置づけていたのかは定かではない。もちろん、それは島田の依拠した考証学における諸子百家の文献学的な再評価という歴史的な流れの延長線上に位置するものであるとも考えられようが、一方では先行して受容の進んでいた西洋哲学史に刺激を受けたとの推察も不可能ではない。例えば、明治 16 (1883) 年にいずれも東京大学哲学科出身の井上哲次郎及び有賀長雄が分担して講述した『西洋哲学講義』は「希臘哲学ハテールス〔タレス〕氏ヨリ始マリ、ソクラテース氏ニ興リ、アリストートル氏ニ至リテ極レリ」⁽⁴⁹⁾との認識の下に、ソクラテース以前からスコラ哲学までの古代哲学を

19 回にわたって論じ、うち 4 回をソクラテス以前の哲学者たちの紹介に当てた⁽⁵⁰⁾。また明治 19 (1886) 年に出版された中江兆民訳『理学沿革史』(上下巻)⁽⁵¹⁾は「印度」「百兒矢垂 [ペルシア]」「支那」などの「古昔国民ノ諸説」から説き起こしつつ、ソクラテス以前の哲学者たちが豊富に論及され、上巻のうちおよそ半分がこれらについての記述に費やされている。

これらに共通する古代における百家争鳴状態の肯定的評価という姿勢が、漢学・支那哲学を体系的な学術史として記述しようとする際にもひとつのモデルとして意識された可能性は高い。現にこのようなモデルを意識して執筆されたであろう「支那哲学史」の記述は、早くは明治 21 (1888) 年に出版された『哲学館講義録』における内田周平の講義「老荘学」⁽⁵²⁾中に見え、また明治 30 年代前半には松本文三郎『支那哲学史』(東京専門学校講義録として明治 31 [1898] 年以降断続的に出版)が、明治 33 (1900) 年には遠藤隆吉『支那哲学史』が登場した。これらの著作は、いずれも周以前から諸子百家までを「支那哲学」における最初期とみなし、同時代を「思想活動の最も盛んなる時代」⁽⁵³⁾などとして肯定的に捉えており、儒家・道家を含めて諸子百家を並列的に紹介し、かつ多くの紙幅を割いている点で共通している。「漢土歴代及我朝学統源流」を記述するに当たっては諸子学を含めた中国古典学全体としての網羅性が求められると、他の「支那哲学史」執筆者と同様に島田もまた考えていたとするならば、上記の道家を含めた諸子学に関する著作は、いわば「歴代学案」編纂の基礎作業としての意味を持っていたとも考えられよう。

初期服部が示した諸子学への関心は、このような同時期における島田の学問的関心と明らかに無関係ではなかった。服部が島田の「歴代学案」構想をどう捉え、また自身の学問をそれとの関係でどう位置づけていたのかは、それ自体は記録されていない。ただ、島田が恐らく諸子学を純粋に訓詁学的な動機だけから考究していたのではなかったのと同様に、服部にとっても諸子学は、当時模索されつつあった体系的な通史としての「支那哲学史」の基礎として研究されなければならない領域としての意味を持っていたのだろう。

(4) 島田篁村の正統な後継者としての服部

ここまで検討したとおり、初期服部の学風は海保漁村・島田篁村の系譜上に位置する、考証学に由来する実証的なそれであり、また服部の諸子学への関心は、島田と共有していたものでもあった。島田の方法論・学問的関心の両面を継いだ服部は、島田の正統な後継者であったとすることができよう。ともに哲学科出身である松本文三郎と遠藤隆吉は、先に述べたようにそれぞれ『支那哲学史』を著

して同分野におけるその学識を示したが、松本の関心は直後にインド哲学へと向かい、また遠藤の関心は社会学へと向かった。

一方で、漢学科において島田を師とした人物としては、先述のとおり早くも明治 21 (1888) 年から哲学館で「支那哲学史」などを講じていた内田周平がいる。ただ、あくまでも儒学を中心に講じ、のちに崎門学へと転じていった内田の関心は、島田・服部のそれとはやや異なっていたと言える⁽⁵⁴⁾。また明治 20 年代後半から 30 年代初期の漢学科からは、いずれも清国へ留学した後に京都帝国大学で教鞭を執ることになった狩野直喜 (明治 28 [1895] 年卒)、桑原隲蔵 (明治 29 [1896] 年卒)、高瀬武次郎 (明治 31 [1898] 年卒) らが輩出している。しかし、桑原・高瀬の関心は「支那哲学」ではなく「支那史学」(東洋史学) にあり、また狩野も、服部という強力な先任者がいた以上、東京における島田の後継者とはなり得なかったと思われる。

第 2 章 明治 32 年当時の留学制度と外山正一

前章では、初期服部の学問的特徴を検証しつつ、それが島田篁村をよく継いだものであり、また服部が島田の正統な後継者と言えることを確認した。本章では、服部が明治 32 (1899) 年に文部省外国留学生として選抜された事情及び要因について、より制度的な面から考察を加えることとし、まず当時の留学制度及び東京帝国大学からの派遣状況について確認した上で、適宜他の資料を用いつつ、服部選抜の「必然性」について検討する。

(1) 服部留学時の文部省外国留学制度及び文科大学

明治 3 (1870) 年に「海外留学生規則」が制定されて以来、文部省は一貫して官費留学生選抜の主導権を握っていたが、明治 20 年代になるとその状況に変化が生じた。すなわち、明治 32 (1899) 年には文部省の留学政策における変化が見られ、東京帝国大学においては各分科大学が大学本部の評議会に対して候補者を推薦し、更に評議会はそれらを取りまとめて大学としての派遣優先順位を付けた上で文部省に候補者リストを上申し、文部省はそのリストに基づき上位何名までを選ぶという方式へと変更された⁽⁵⁵⁾。この変化に伴い少なくとも東京帝国大学内では文部省へ提出する「派遣理由書」が作成されるようになり、そこではまず留学候補者それぞれの氏名及び専攻が列挙された上で、更に個別の専攻について留学生の派遣を要する理由が述べられた。服部が留学生として選抜されたのは、まさにこの転換が生じた明治 32 (1899) 年であった。派遣理由書において服部の専攻は「漢学(経学)」とされ、その理由は次のように記されている。

漢学（経学）

漢学ハ支那哲学トシテ、又国文ノ淵源トシテ、文学諸科中ニ於テ重要ナル学科タリ、然ルニ近時漢学専門ノ耆宿凋落シ、之レガ継続者トシテ、講座ヲ担任スベキモノ、漸ク跡ヲ絶タントスルノ恐アリ、是故ニ速ニ留学生ヲ支那及ビ西洋ニ派遣シテ其候補者タラシムルノ要アリ⁽⁵⁶⁾。

つまり、服部は「漢学専門ノ耆宿」の「継続者」として、「講座ヲ担任スベキモノ」として位置づけられていたことになる。また、この「漢学」が「国文ノ淵源トシテ、文学諸科中ニ於テ重要ナル学科」であるという一節は、例えば明治 15（1882）年の古典講習科設立を伝える『東京大学第二年報』中の「本邦旧典、史類、歌詞、文章等ノ如キハ、史家及ビ社会学、政事学、修辞学等ニ従フ者ノ、尤モ欠ク可ラザル所ナリ」⁽⁵⁷⁾や、あるいはその翌年に中村正直が古典講習科乙部（漢書課）設立の際に述べた「方今洋学ヲ以テ名家ト称セラルハ者ヲ觀ルニ元來漢学ノ質地アリテ洋学ヲ活用スルニ非ルモノナシ」⁽⁵⁸⁾などを連想させるものであり、和漢の古典が諸学問の基礎として有用であるという考え方（あるいは説得術）が、明治 32（1899）年の段階においてもなお大学内において用いられていたことを示すものである。

なお冒頭に「漢学ハ支那哲学トシテ」と「支那哲学」の名が記されてはいるものの、それは漢学と訣別した「新しい中国古典学」としての「支那哲学」という意味を帯びていたと言うよりも、この時点では未だ従来の「漢学」の性格を色濃く残したものの、あるいは単に「漢学」を呼び換えたものに過ぎなかったと考えられる⁽⁵⁹⁾。

これに関連して、当時の文科大学における漢学・支那哲学系講座の状況について確認したい。明治 26（1893）年に文科大学に講座制が導入された際に「漢学支那語学」第一講座担任教授に就任したのは、前述の島田篁村であったが、その島田は明治 31（1898）年 8 月に他界してしまう。同講座を継いだのは島田より 11 歳高齢の重野安繹（1827-1910）であり、当時既に 70 歳を超えていた。重野は明治 25（1892）年の久米邦武の「神道ハ祭天ノ古俗」にまつわる筆禍事件に伴って一度文科大学教授を辞しており、この人事は言わばベテランの再登板という形であったが、それは重野を再び教授にせねばならないほどに文科大学の漢学系人材が逼迫していたことの裏返しでもあったと言えよう。「漢学支那語学」第二講座は明治 28（1895）年から根本通明（1822-1906）が担当していたが、根本は重野よりも更に高齢であった。

このような状況の中で、島田を継ぐべき漢学・支那哲学系教授の補充は文科大学にとって急務であったと考えられ、それは同候補として選抜された服部の高い留学生候補者順位からもうかがえる。明治 32 (1899) 年度の留学生候補者の中で、服部は文科大学としては筆頭、全学順位でも法科大学の美濃部達吉、理科大学の池田菊苗ら「実学」系の候補者らを抑えて 20 名中第 5 位に位置していた⁽⁶⁰⁾。

以上を勘案すると、服部は、新時代にふさわしい、西洋哲学の方法論を取り入れた中国古典学としての「支那哲学」を確立すべしという期待を背負って留学生として教授候補に選抜されたと考えるよりも、第一義的には東京帝国大学における「漢学支那語学」講座の補充要員として選抜されたと見た方が、実情に即していると言えよう。

(2) 外山・濱尾・矢田部トライアングルと服部との関係

既に「はじめに」において述べたように、服部は自身の選抜について、ともに東大総長・貴族院議員・文部大臣を歴任していた外山正一及び濱尾新、及び当時の服部の勤務校である東京高等師範学校の校長であった矢田部良吉らによる「話合」の結果であると述懐している。三者のなかでもとりわけ服部との関係が深かったのは外山及び濱尾であり、外山は服部の文科大学在学中に必修科目「社会学」及び「心理学」を担当し、濱尾は服部の卒業後の最初の職場である文部省専門学務局長であった。更に濱尾・外山が文部大臣に就任した際には、服部はそれぞれの秘書官となって彼らの執務を支えた。

明治 31 (1898) 年 6 月に第 3 次伊藤内閣が退陣して外山が文部大臣を辞すると、これに伴い服部も文部大臣秘書官の職を解かれ、9 月には古巣の東京高等師範学校教授に復帰した。更に翌年の 3 月には東京帝国大学文科大学の講師嘱託となり、5 月には同助教授となるとともに清国及びドイツへの留学が決定した。同年度の『東京帝国大学一覽』を見る限り、この時期の服部は授業を担当していない。そのため、この講師嘱託及び助教授就任は全く以て留学準備のための人事であったと考えられる⁽⁶¹⁾。このような経歴と併せて考えると、外山・濱尾・矢田部らによる「話合」が行われたのは、服部が文部大臣秘書官を退いた明治 31 (1898) 年 6 月から、講師を嘱託された明治 32 (1899) 年 3 月の間にかけてであったと考えられる。

ところで既に見たとおり、明治 32 (1899) 年当時の東京帝国大学における留学生選抜は、あくまでも各分科大学内での候補者の推薦、及び大学本部の評議会による学内総合順位決定の後に、候補者名簿を「派遣理由書」とともに文部省へ上申するというものであった。服部の留学が協議されたであろう上記の期間において、濱尾は高等教育会議の議長職、外山は貴族院議員かつ高等教育会議員を務め

ていたものの、両名ともに東大の学内職に就いていたわけではない。矢田部は明治 10 (1877) 年から明治 24 (1891) 年にかけて理科大学で教授を務めてはいたものの、明治 31 (1899) 年から 32 年当時にかけてはあくまでも東京高等師範学校長であった⁽⁶²⁾。

濱尾・外山はともに東大総長を務め、また外山は文科大学長をも経験した人物ではあるが、あくまでも服部選抜当時の肩書きに基づいて「学内」と「学外」の区別を施すのであれば、上記の三名はいずれも「学外」の人物であり、留学生選抜に干与できる立場であったとは言えないようにも思われる。この点についてより詳細に考察すべく、更に分析をすすめる。

(3) 外山正一の影響力——『外山正一日記』より

服部の留学に関する学内選考に影響を与えたと思われる上記三名のうち、特に強い影響力を持ったのは総長及び文部大臣経験者の濱尾及び外山の両名であったと考えられる。うち外山については同時期の日記が残されており(明治 31 [1898] 年 5 月 28 日から明治 32 [1899] 年 12 月 25 日まで)、服部の留学が協議されたであろう時期の外山の動向を示すものとして有用であると思われる。そこで同日記のうち服部に関連する記事を追い、これを分析することにする。ただし同日記については基本的に翻刻資料⁽⁶³⁾を用い、日記原本⁽⁶⁴⁾を確認する際にはその旨を述べる。

同日記からは、明治 31 (1898) 年 6 月の外山の文部大臣退任後も、服部が頻繁に外山と接触していたことがうかがえる。8 月 16 日には「島田 [篁村] 博士容体宜シカラザル由、三浦謹之助氏ノ診断ヲ乞ヒタキ由」を告げる服部に対し、外山は「紹介状ヲ呈」しており、島田が他界した後には服部は外山を訪れ「先日来ノ礼ヲ述」べている。また同年 10 月 20 日から 30 日にかけて服部は 3 度外山を訪問しており、最終日の 10 月 30 日にはそのまま外山に同行して「宴会」に参加した。同年は 11 月 24 日、12 月 31 日に更に外山を訪問し、11 月 24 日の訪問では文部省内の人事について「本日沢柳ハ普通学務局長ニ、上田ハ専門学務局長ニ任ゼラレ、嘉納 [治五郎] ハ非職ニ成リタル由」を報告している。翌年 2 月には服部の長男がジフテリアにより他界し、外山は弔問に訪れている⁽⁶⁵⁾。その後 3 月に 2 度、7 月に 1 度、8 月に 3 度服部は外山を訪れ、服部が清国への旅程に立った 9 月 17 日には、外山は新橋駅で服部を見送った。その 2 日後、9 月 19 日には「服部宇之吉氏養父嘉平⁽⁶⁶⁾」が外山を訪れ「此ノ度洋行ニ就キ礼詞ヲ述ベタ」という。

以上が同時期の「外山正一日記」中の服部に関する主な内容であるが、見てのとおり服部の進退に関する直接的な言及は無く、ただ外山と服部との接触の事実が示されるに留まる。しかし服部の清国出発後、9 月 19 日に「養父」が外山に対

して「礼詞ヲ述べ」ていることから、服部の選抜に当たっては少なからず外山の影響力が働いていたことが確認できる。

外山の影響力について、更に同日記を基に検討する。同日記からは、同時期において留学相談者が頻繁に外山のもとを訪れていることが分かる。まず明治 31 (1898) 年 6 月 14 日には金沢庄三郎⁽⁶⁷⁾が訪問して「朝鮮へ留学生として行き度由の願望を陳述」し、翌年 1 月 15 日には谷本富⁽⁶⁸⁾が来訪し「木下京都大学総長⁽⁶⁹⁾ヨリ京都大学教授トスル為メニ洋行セシムベキ由申渡リアリタル由」を外山に告げている。2 月 5 日には大日本仏教青年会幹部であった広田一乗が訪れ「本願寺より支那行之相談ありたれども謝絶せし由を語」ったところ、外山は「支那の機会ハ決して失ふべからざる所、廿年も滞在之積りで宜敷く行くべしと懇々説いたという。更に 3 月 13 日には渡辺龍聖が「音楽学校独立の際免ぜらるる場合には留学所望之由」⁽⁷⁰⁾を外山に告げ、3 月 19 日には狩野直喜が「支那留学京都大学及外国語学校より申出之件」⁽⁷¹⁾について外山を訪問している。これらの記録からは、留学希望者にとって、また留学について相談事のある人間にとって外山が訪問すべき重要人物であったことがうかがえる。では、その影響力はどこに由来するものだったのだろうか。次節で更に検討する。

(4) 外山正一の影響力と服部の選抜

外山が文部大臣退任後も貴族院議員を務めていたことは先述した。貴族院では明治 32 (1899) 年 3 月 7 日に「海外留学生増員ニ関スル建議」が提出されているが⁽⁷²⁾、外山の日記の 3 月 3 日の記事には、提出日・発議者・賛成者が空欄となった同名の「建議案」として、その本文及び提出理由が記されており、更に日記原本を確認すると、そこには仔細な訂正・推敲の跡がうかがえ、外山が同「建議」の作成あるいは起草に関与していたことが推察される。日記内の「建議案」の本文によれば、それは新設予定の帝国大学・高等学校はおろか「『既設』直轄学校」においても現に生じている教員不足を解消すべく「政府ハ海外留学生ノ人員ヲ大ニ増加スルノ計画ヲ定メ、其ノ予算ヲ次ノ議会ニ提出セラレンコトヲ希望ス」るものであった。「海外留学生増員ニ関スル建議」は長岡護美及び三島弥太郎を発議者として貴族院に提出されると、その翌々日の 3 月 9 日に可決された⁽⁷³⁾。この 4 ヶ月後、文部省は高等教育の整備拡張計画を示した「八年計画調査書」を閣議提出しており、そこでは同計画を遂行するための手段としての留学生派遣計画が示された⁽⁷⁴⁾。

既に同「建議」の提出以前に日清戦争後の急速な工業化・近代化及び中学校の増設を受けて高等教育機関及び教員の拡充が広く論じられ、そのための建議も複数提出されていたとはいえ⁽⁷⁵⁾、外山が留学生の派遣を増強する同「建議」の作

成・起草に携わっていたとすれば、それは彼が文部大臣退任後も貴族院議員として、また高等教育会議員として、教育行政とりわけ留学政策に一定の影響力を及ぼしていたことを示すものと考えることができる。また外山のもとに多数の留学生在が訪れていることから、彼が元文部大臣として、あるいは元東大総長として、留学生の人選にも影響力を持っていたことがうかがえる⁽⁷⁶⁾。

服部が島田の唯一の正統な後継者と呼ぶべき存在であったことは既に第 1 章で述べたが、その島田の病死によって空いた穴を埋め得る者は、服部のほかにいなかった。このような事情から、服部はまずは東京帝国大学において「漢学（経学）」を継ぐべき存在として位置づけられることになった。また同時期の東京帝国大学における留学生選抜は、制度としては学内推薦を基礎とするものではあったが、服部の選抜においては外山がいわば留学政策の重鎮としての影響力を発揮した可能性が高い。服部が東京帝国大学における漢学・支那哲学の正統な後継者となるべく留学生に選抜されたことには、その前任者としての島田のみならず、外山からの厚い信頼と期待も寄与していたと言える。なお、外山は新橋駅で服部を見送ったおよそ半年後（明治 33 [1900] 年 3 月 8 日）に世を去った。島田と外山の逝去の時期がわずかでも異なっていたとしたら、上に述べた事情はまた違っていたかもしれない。

おわりに

本稿では、服部宇之吉が東京帝国大学における教授候補として文部省外国留學生に選抜されたのはなぜかという問題意識の下に、2 つの視点から考察を行った。まず第 1 章では初期服部の学問的特徴について考察し、その主要な関心は早くから漢学・支那哲学とりわけ諸子学に向かっていたこと、またその実証的な方法論は、海保漁村・島田篁村と続く系譜の上に位置づけられることを確認した。更に諸子学への関心は島田も共有しており、それが通史（歴代学案）編纂の意図に支えられていた可能性のあることを指摘した。併せて諸子学への注目は、同時期に著されていた各種の『支那哲学史』にも共通していたものであることと同時に、先行していた西洋哲学史の受容がその誘因の一つであると考えられることを指摘した。次に第 2 章では、当時の留学制度及び具体的な選抜状況について「外山正一日記」を主要な資料として考察を進め、服部が選抜された明治 32 (1898) 年当時の東京帝国大学における留學生の選抜制度が学内推薦に基づいていたこと、及び服部が「漢学（経学）」の専門として位置づけられていたことを確認した。また、服部と親交の深かった外山が留学政策に一定の影響力を持っていたこ

とを明らかにし、服部が「学内」推薦を経て高順位で留学候補者として選抜された背景には、「学外」からの外山の影響力があったことを指摘した。

本稿では服部の「初期」に限定して分析と考察を行ったため、この時期における服部の学問形成が、晩年までを含めた服部の学問全体の中で与えられるべき位置づけ、特に「孔子教」論との関係については詳しく考察することができなかった。これらについては、本稿で得られた知見を基礎としつつ、更に研究を進めていきたい。

表 1：清国留学以前の服部宇之吉の著作（著書及び論文）一覧（年は明治）⁽⁷⁷⁾

服部の身分・所属	年	月	書名又は論文名	発表誌（論文） 又は出版社（書籍）
帝国大学	21	11-12	「智識相对論」	『教育報知』第 146・148・150 号 （「寒江釣夫」名義で発表）
同上	21	12	「列子学説一斑」	『哲学会雑誌』第 2 冊第 23 号
同上	22	5	「因明大意」	『教育週報』第 5 号
同上	22	5	「純正哲学ノ本領」	「福島県青年会雑誌」第 1 号
同上	22	5-6	「純正哲学ノ本領」	『教育週報』第 6-7 号（「福島県青年会雑誌」掲載のものと同内容）
同上	22	5-6	「社会的現象として降神術を論ず」	『哲学会雑誌』第 3 冊第 27・28 号
同上	22	9	「降神術ノ話」	『教育週報』第 21・24 号
同上	22.12 - 23.2		「ソクラテスの哲学」	『教育週報』第 34・35・36・38・40・42 号
文部省	24	1-3	「ソクラテス ソ氏の伝」	『教育報知』第 249・250・252・254・259 号（「ソクラテスの哲学」を加筆したもの）
同上	24	5-6	「老子講義」	『海潮』第 1 号・第 2 号
文部省／ 第三高等中 学校教授	24.8 - 25.8		「支那文学講義 諸子門老子」	『支那文学』第 2 号から少なくとも第 23 号まで
第三高等中 学校教授	25	1	「禁酒主義の一方便」	『反省会雑誌』第 7 巻第 1 号

同上	25	2- 11	「原始信仰の梗概」	『反省会雑誌』第7巻第2号・3号・5号・6号
同上	25	10	『中等論理学』	富山房
同上	26	3	「希臘哲学即古代哲学（紀元前六百年より紀元六百年に至る）」	『反省会雑誌』第8巻第3号
同上	26	不明	『心理学』	不明
高等師範学校教授	29	4-5	「墨子年代考」	『哲学会雑誌』第11巻第110-111号
同上	29	10	『倫理学』	金港堂書店, 「教員文庫」シリーズ
同上	29	11	「荀子年代考」	『哲学雑誌』第11巻第117号
同上	30	1	『中等論理学』(再版)	富山房, 明治25(1892)年出版の同題の訂正再版
同上	30	2	「習字に就きて」	『教育公報』第187号
同上	30	5	「名家の学を論ず」	『東亜学会雑誌』第1編第6号
同上	30	9	「中学教育に於ける倫理科教授に関して漢学者に問ふ」	『東亜学会雑誌』第1編第8号
文部大臣(濱尾新)秘書官	31	2	「墨子ノ学ヲ論ズ」	『東亜学会雑誌』第2編第2号
同上	31	3	「詩書に見えたる天に就きて」	『哲学雑誌』第13巻第133号
東京高等師範学校教授	31	11	「漢文を学ばん人に告ぐ」	『学窓余談』第1巻第3号
同上	32	3	「孟子闢異端弁」	『東洋哲学』第6編第2号
東京帝国大学文科大学助教授(留学中)	32	10	『倫理学』(再版)	金港堂書店, 明治29(1896)年出版の同題の訂正再版
同上	32	11	『論理学教科書』(漢文)	富山房

表 2：島田篁村による又は関与が考えられる『哲学雑誌』中の論考（年は明治）

年	月	著者名	著作名	掲載号
25	6	島田重礼	解題 韓非子	第7冊第64号
25	11	島田重礼	解題 荀子	第7冊第69号
26	6	島田重礼	解題 列子	第8冊第76号
26	12	島田重礼	解題 荘子	第8冊第82号
27	10-11	記載なし	解題 鬻子	第9冊第92号, 93号
27	11-12	記載なし	解題 関尹子	第9冊93号, 94号
28	5	記載なし	解題 鬼谷子	第10冊第99号

注

(1) 本稿では、明治時代から昭和初期にかけて行われた広く「中国古典学」と呼ぶべき営みのうち、経学を中心としつつも必ずしもそれに限定されない思想を扱う分野、あるいは「哲・史・文」の三分類法を適用した際に「哲」に入ると考えられる（又は考えられた）分野を「漢学・支那哲学」と呼ぶ。また明治 10（1877）年の東京大学の設立以降同分野を担当した学科名及び講座名の変遷については、東京大学百年史編集委員会（1985）の「中国哲学」の項などを参照。

(2) 本稿では同期間を服部の「初期」とする。

(3) 井上哲次郎も東京大学出身者であり、また同分野について深い知見及び素養を持っていたことは確かである。しかし井上は講義名として「東洋哲学史」「比較宗教及東洋哲学」などを講じた経験はあるものの「支那哲学」を講じた経験はなく、またその講義内容もインド哲学を中心としたものであったため（磯前・高橋, 2003）、東大における漢学・支那哲学の系譜上には位置づけ難い。

(4) 服部は、孔子の教え（孔子教）に強い普遍性を見出しつつ、その本旨を最もよく受け継いだのは「支那」ではなく日本であるとした。「憶ふに儒教の真髄は孔子教にある。然るに、支那に於て此の真精神は久しく没却せられ、現代に至つて或は三民主義に誤られて発揚されず、[……] 為に東西具眼の士をして、孔子教が却つて我国に保存普及されて居るのを観て、我が国民の卓越せる文化的建設力を感嘆せしめて居る状態である。」（服部, 1938, p. 1）

(5) 戸川, 1966, p. 11.

(6) 李, 1993, p. 4.

(7) 上述のとおり、実際の留学期間は明治 32（1899）年から明治 35（1902）年にかけてのおよそ 3 年間であった。これはドイツ留学の途中で京師大学堂におけるポストを打診され、服部が受諾したことによる。

(8) 服部最晩年の回想である「自叙」では、「総教習」と述べている(服部, 1936, p. 18)。しかし大塚によれば、正しくはその下に位置する「正教習」であって、両者の間には権限に多大な差があった(大塚, 1988, pp. 53-60)。服部自身も、赴任当時は「私の支那に於ける位地といふものは唯一個の教師の位地でございます、決して私は支那政府の教育の顧問であるとか或は支那政府の教育行政の事に職務上関係すべき位地に立つて居りませぬ」(服部, 1904a, p. 14)と述べている。

(9) 服部, 1936, pp. 12-13.

(10) 東京大学百年史編集委員会, 1985, p. 516.

(11) 服部, 1936.

(12) 現在の南青山に存在した丹羽家の下屋敷か。上屋敷は現在の永田町に存在した。

(13) 同塾の詳細は不明。「岡寿考(としなり)」の名前は『寛政重修諸家譜』中に見えるものの、それによれば「[寛政] 八 [1796] 年四月十九日致仕す。時に六十一歳」とあり、同人物は少なくとも明治期には存命ではない(林原編, 1965, p. 225)。あるいは岡千仞(号: 鹿門)が芝・愛宕に開いていた「綏猷堂」(すいゆうどう, 明治4年開塾)のことかとも疑われるが、「綏猷堂門人録」(森ほか編, 1980, pp. 327-357)には記録がない(もっとも同史料は明治8 [1875] 年以降に入門した門人の記録を中心としており、服部の入塾想定時期である明治6年および7年についてはカバーしきれていない)。

(14) うち漢学は「[麻布] 区材木町宮崎良山の塾」に学んだというが、同塾も詳細は不明。

(15) 漢学会, 1939, pp. 356-362.

(16) 東京大学百年史編集委員会, 1985, p. 515.

(17) 服部, 1889a, p. 9.

(18) 服部, 1892a, pp. 25-26.

(19) 服部, 1892b, pp. 12-13.

(20) 服部の諸子学への関心は壮年期の事業である『漢文大系』編纂(明治42 [1909] 年~大正5 [1916] 年)においても発揮され、服部は『韓非子翼』『老子翼』『莊子翼』『列子』『七書』『荀子』『淮南子』などの解題を担当した。

(21) 服部, 1888, p. 676.

(22) 池田蘆洲(1866-1933)及び古典講習科卒業生の山田濟斎(1867-1952)が、久米幹文(1828-1894)を社主に頂いて結成した(三浦, 1998, p. 455)「同文社」が、明治24(1891)年8月から少なくとも翌年8月にかけて発行した。廃刊時期は不明であるが、調査の限り明治25(1892)年8月発行の第23巻まで確認できる。同巻では服部の文章は途中で途切れており、連載の継続をうかがわせる形ではあるものの、現時点では未完と判断する。

(23) 南宋の林希逸による老子注釈書である『老子(虞齋)口義』は、室町以前に日本に伝来した(王, 2001, p. 165)。江戸期に林羅山による訓点本が『莊子口義』『列子口義』と併せて刊行され、いわゆる「三子」の「口義」が揃うと、17世紀後半における「三子」読者はおおむね林希逸注を読むことになった。徂徠学が登場するとその批判を受けたものの、「三子口義」の流行は服部が「老子」に解説を施した明治・大正期にまで継続した(小島, 2005, p. 9)。

(24) 服部, 1891, p. 21.

(25) 「墨子年代考」において、服部は墨子の出自について『史記』『漢書』『隋書』などの宋人説を退けて高誘『呂氏春秋』注の魯人説を取り、墨子の生卒年や「全書ノ体裁」の考証から「其ノ書ハ其ノ没後門人等ノ手ニ成リシモノ」とした(服部, 1896a)。また「荀子年代考」では、荀子の年齢・出仕時期について『史記』と劉向『序録』との総合的考察から導かれる矛盾から説き起こし、『塩鉄論』毀学篇、応劭の『風俗通』、汪中の『述学』などの議論を紹介しつつ、宋濂の『諸子弁』を「最も事実ニ近キモノ」としている(服部, 1896b)。

(26) 服部, 1897, p. 20.

(27) 服部, 1897, p. 17.

(28) 初期服部が本格的に経書について論及しているのは、管見の限り同論文においてのみである。

(29) 服部, 1899a, p. 66.

(30) 京師大学堂に正教習として赴任した際、服部は教育学、論理学、心理学を教えたとされており(大塚, 1988, p. 58), このうち論理学及び心理学については服部が漢文による教科書を自作している(表1参照)。論理学については明治25(1892)年の『中等論理学』ではなく明治32(1899)年の『論理学教科書』の漢訳であると考えられる(服部, 1899c)(服部, 1904b)。心理学については、漢訳版と思われる『心理学講義』についてはその存在が確認できるものの(服部, 1905), その元になったと思われる日本語版については存在を確認できず、両者の関係は定かではない。

(31) 服部, 1899b, 表紙.

(32) 服部, 1896c, pp. 2-4.

(33) 同書, p. 26.

(34) 同書, p. 109-131.

(35) 同書, p. 152.

(36) 同書, p. 209.

(37) 同書, pp. 5-7.

(38) 約1年後に発表された「中学教育に於ける倫理科教授に関して漢学者に問ふ」において、服部は「漢学者」が「倫理」を教授する問題点について、更に詳細に指摘することになる。

(39) 服部, 1896c, p. 209.

(40) 本稿では「孔子教」論については詳述しないが、服部によれば孔子教とは「決して宗教ではない」「狭き意味に於て謂ふ儒教」(服部, 1917, p. 41), すなわち宗教性を脱して倫理と化した儒教であり、その名の示すとおり孔子はその創始者としての位置づけを与えられる。大正期以降の服部の著作は、この「孔子教」に関するものに集中している。

(41) 井上は、服部が哲学科出身にもかかわらず中国古典に興味を示した動機について「蓋し其の師の感化に因ることであろう」、すなわち「服部博士は多分島田重礼氏の教を受けて、之に推服し、其の結果、漢学に興味を抱かれるようになったであらうと思ふ」と推測している(井上, 1939, p. 15)。

(42) 町田, 1998, p. 101.

- (43) 古賀, 2010, pp. 5-6.
- (44) 東京大学百年史編集委員会, 1985, p. 508.
- (45) 塩谷, 1918, p. 2.
- (46) 黎純齋, すなわち黎庶昌 (1837-1897) は清末の外交官で, 明治 14 (1881) 年から 17 (1884) 年, 及び明治 20 (1887) 年から 23 (1890) 年まで駐日公使を務めた。「与黎純齋書」は『篁村遺稿 上』に収録。同書の年代は不明であるが, 町田は「黎庶昌来日後, 比較的早い折りの書簡と思われる」と指摘する (町田, 1998, p. 103)。
- (47) 町田, 1998, pp. 102-105.
- (48) 例えば「本朝諸儒の経説を論ず」では「詩文」「音韻」については言語の面から「彼土」に一日の長があるが「経子の義理を解説することは学識の優劣に因ることにて, 決して東西の別なし」と述べ、「支那人に先だつこと数十年或は百余年前の」「我邦の学者の説」について日中の両説を比較しつつ論じており, 特に山井鼎の『七経孟子考文』を高く評価した (島田, 1899)。
- (49) 井上, 1883, pp. 8-9.
- (50) 「テールス氏」「ピサゴラス学派」「エリア学派」「ヘラクリトス氏」「エムペトクリース [エンペドクレス] 氏」「原子論者」(「リュウシッポス [レウキッポス]」及び「デモクリトス」)「アナキサゴラス氏」を紹介した。またソクラテスからプラトンへの系譜からは外れたソクラテスの弟子の一派であった「メガラ学派」「シリン学派 [キュレネ派]」「犬儒学派」についても紹介している。
- (51) 中江訳, 1886。文部省編輯局が出版。原著はアルフレッド・フイエ (Alfred Fouillée, 1838-1912) “Histoire de la Philosophie”, 1875年。
- (52) 内田は哲学館の「第一年級」向け講義である「老荘学」において, 「専ラ一学ヲ攻ムル者ト雖モ多少他学ノ性質ヲ知セザルベカラズ」として, 班固の「十家」の分類に従って「周春秋戦国ノ際ニ興リタル学術ノ種類並ニ其性質ノ大略ヲ示シ」, これを「老荘学講義予篇」と位置づけた (内田, 1888, p. 55)。なお同じく内田の手による「第二年級」向けの講義として「支那哲学 (儒学史)」が掲載され, その冒頭で「支那哲学」の時代区分として「古代儒学」(=「周一代」, 「発明ノ時期」)「中古儒学」(=「漢魏唐」, 「訓詁ノ時期」)「近世儒学」(=「宋元明」, 「義理ノ時期」)と儒学に基づく通史的視点を示したが (内田, 1889, p. 1), 実際には『論語』『尚書』『易経』の読解に基づく解説が講義の中心を占めた。「第三年級」向けの講義録としては同じく内田による「支那学」が掲載されたが, これも実際には『論語』『易経』などの解説を中心とした, いわば「儒学史」であった。
- (53) 遠藤, 1900, p. 1.
- (54) 学問的特徴ではないが, 内田が選科の出身であったことも併せて考慮すべきであろう。明治 20 年代に東京帝国大学文科大学哲学科の選科生として過ごした西田幾多郎の回想 (西田, 1906) が示すように, 本科と選科との間には待遇的・心理的な差別が存在していたと言える。
- (55) 辻, 2008, pp. 22-23.
- (56) 東京大学文書館蔵, 1899.
- (57) 斯文会, 1929, p. 232.

(58) 中村, 1883, p. 45.

(59) 例えば松本文三郎は、「支那哲学」には「終始を一貫する組織系統なく」「確然不動の定義なるものなきために「論理的思想」が欠乏し、また「高尚なる思弁あるも精確なる研究なきために「物理的思想」が欠乏するという欠点があると指摘している（松本, 1898）。

(60) 辻, 2000, p. 30.

(61) そもそも当時の「9月入学・3学期制」の学事暦において、3月というのは第2学期の半ば、5月は第3学期の半ばであり、学期途中の就職及び昇進は不自然と言わざるを得ない。

(62) 当時帝大総長を務めていた濱尾新に、矢田部良吉を教授として推薦したのは外山正一であり（外山, 1899, p. 533）、また「非職」となった矢田部に高等師範学校に職を得させるべく尽力したのも外山正一（及び後に高等師範学校長を務めた嘉納治五郎）であったという（外山, 1899, pp. 557-558）。外山と矢田部の関係に限って言えば、外山は一貫して「推薦者」という役割を果たしていたことになる。服部こつについても、明治 23（1890）年の彼の最初の就職の際に服部を文部省の濱尾に「推薦」したのは外山であったが（服部, 1936, p. 9）、留学時においても外山が「推薦者」としての役割を果たした可能性は少なくないと考えられる。

(63) 柳生, 1977-1978.

(64) 東京大学総合図書館蔵.

(65) 服部はおよそ半年のうちに義父（島田篁村）と長男を失ったことになる。

(66) 正しくは「喜平」か。戊辰戦争により実父を失った服部宇之吉は、以後叔父の喜平に引き取られて育てられたという（東方学会編, 2000）。

(67) 金沢庄三郎（1872-1967）：のちに『日鮮同祖論』を著した言語学者。実際にこの年の10月から大韓帝国へと留学している。

(68) 谷本富（1867-1946）：教育学者。明治 33（1900）年よりヨーロッパへ留学し、帰国後に京都帝大教授に就任した。

(69) 木下広次（1851-1910）：京都帝国大学初代総長（在任 1897-1907）。

(70) 東京音楽学校は当時高等師範学校の管轄下にあり、渡邊龍聖（1865-1945）は高等師範学校教授であった。明治 32（1899）年に東京音楽学校が高等師範学校からの「独立」を果たしても渡邊は「免ぜらるる」ことなく、明治 34（1901）年には東京音楽学校校長に就任した。

(71) 明治 28（1895）年に東京帝国大学文科大学漢学科を卒業した狩野は、この明治 32（1899）年から東京外国語学校で漢文を教えている。狩野の清国出發は明治 33（1900）年4月であるが、前年の3月の時点で既に京都帝国大学から教職の打診を受けていたことが分かる。

(72) 官報, 1899a, p. 151.

(73) 官報, 1899b, p. 188.

(74) 辻, 2008, pp. 26-28.

(75) 大西, 2010, p. 44.

(76) 文部大臣を退任した外山は足繁く大学図書館に通うようになり、時折、大学本部にも顔を出した。帝国大学の同窓会であった学士会の会合にも定期的に参加しており、当時にあつては「学内」と「学外」の区別は曖昧であったと言うべきであろう。

(77) 『倫理学』及び『論理学教科書』が出版された当時、服部は既に清国へ留学中であるが、序文の日付がそれぞれ「明治三十二年六月」「明治三十二年八月初旬」となっていることから留学前に脱稿していたものと考えられるため、同表に掲載した。また「社会的現象として降神術を論ず」は海外論文の「大意を訳出」した無署名記事であるが、直後に発表された「降神術ノ話」において、同名の論文について「私ハ其大意ヲ訳シテ哲学会雑誌第廿七号及第廿八号ニ出シテ置キマシタカラ、御一読ヲ望ミマス」（服部、1899b, p. 5）と述べていることから、服部の訳になるものとみなし、同表に掲載した。

参考文献

- 井上哲次郎（1883）『西洋哲学講義 卷之一』阪上半七，国立国会図書館近代デジタルライブラリー：<http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/752842>
- 井上哲次郎（1939）「服部宇之吉先生を追懐す」斯文会『斯文』第21編第9号 pp. 14-17.
- 磯前純一・高橋原（2003）「井上哲次郎の「比較宗教及東洋哲学」講義：講義と翻刻」東京大学史史料室『東京大学史紀要』第21号，pp. 1-55.
- 内田周平（1888）「老荘学」哲学館『哲学館講義録』第1年級第20号，pp. 47-58.
- 内田周平（1889）「支那哲学（儒学史）」，哲学館『哲学館講義録』第1期第2年級第2号，pp. 1-8.
- 遠藤隆吉（1900）「支那哲学史」金港堂書籍，国立国会図書館近代デジタルライブラリー：<http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/753272>
- 王迪（2001）『日本における老荘思想の受容』，国書刊行会.
- 大塚豊（1988）「中国近代高等師範教育の萌芽と服部宇之吉」国立教育研究所『国立教育研究所紀要』第115集，pp. 45-64.
- 大西巧（2010）「日清戦後における文部省教育政策をめぐる一考察～「八年計画」立案までを中心に～」，関西大学教育学会『教育科学セミナー』第41号，pp. 44-54.
- 漢学会（1939）「服部先生追悼録」，東京帝国大学文学部支那哲学研究室漢学会『漢学会雑誌』第7巻第3号，pp. 349-403.
- 官報（1899a）第4702号，3月8日，国立国会図書館近代デジタルライブラリー：<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2947993>
- 官報（1899b）第4704号，3月10日，国立国会図書館近代デジタルライブラリー：<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2947995>

- 古賀勝次郎 (2010) 「安井息軒を継ぐ人々 (三) 一島田篁村・岡松蘧谷・竹添井井一安井息軒研究(8)」早稲田大学社会科学学会「早稲田社会科学総合研究」第11巻第1号, pp. 1-25.
- 小島毅 (2005) 「解題—林希逸『老子麴齋口義』の背景」松下道信主編 (小島毅・横手裕監修) 『林希逸『老子麴齋口義』訳注稿』, 平成 15~16 年度科学研究費補助金 (基盤研究 (C) (2)) 研究成果報告書, 東京大学大学院人文社会系研究科.
- 塩谷時敏 (1918) 「篁村島田先生墓碑銘」『篁村遺稿 上』国立国会図書館近代デジタルライブラリー: <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/926809>
- 斯文会 (1929) 『斯文六十年史』斯文会.
- 島田篁村 (1899) 「本朝諸儒の経説を評す」東京学士会院『東京学士会院雑誌』第18編第10巻, pp. 431-445.
- 辻直人 (2000) 「明治30年代の文部省留学生選抜と東京帝国大学」東京大学大学院教育学研究科『東京大学大学院教育学研究科紀要』第40巻, pp. 27-35.
- 辻直人 (2008) 「二十世紀初頭における文部省留学生の派遣実態とその変化についての考察」, 東京大学史史料室『東京大学史紀要』第26号, pp. 21-38.
- 東京大学総合図書館蔵「日記 M31. 11. 1 - M32. 10. 24」『外山正一史料』.
- 東京大学百年史編集委員会 (1985) 『東京大学百年史 部局史 1』東京大学.
- 東京大学文書館所蔵 (1899) 「塚本靖外十六人海外派遣ノ義上申 留学生派遣ヲ要スル理由」, 『留学生関係書類 自明治三十二年至明治三十七年』.
- 東方学会編 (2000) 『東方学回想 I 先学を語る (1)』東方学会.
- 戸川芳郎 (1966) 「漢学シナ学の沿革とその問題点—近代アカデミズムの成立と中国研究の“系譜” (二) —」理想社『理想』, 397号, pp. 8-25.
- 外山正一 (1899) 「故矢田部博士追悼会に於ける演説」湘南堂書店『山存稿 後編』, 1983, pp. 530-560.
- 中江兆民訳 (1886) 『理学沿革史 上』文部省編輯局, 国立国会図書館近代デジタルライブラリー: <http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/753031>
- 中村正直 (1883) 「古典講習科乙部開業演説」東京学士会院『東京学士会院雑誌第五編 (自明治十六年一月至全十月)』 pp. 32-48.
- 西田幾多郎 (1996) 『西田幾多郎随筆集』岩波書店
- 服部宇之吉 (1888) 「列子学説一斑」哲学会『哲学会雑誌』第2冊第23号, pp. 665-676.
- 服部宇之吉 (1889a) 「純正哲学ノ本領」福島県青年会『福島県青年会雑誌』第1号, pp. 3-10.
- 服部宇之吉 (1889b) 「降神術ノ話」教育週報社『教育週報』第21号, pp. 4-5.
- 服部宇之吉 (1891) 「老子」同文社『支那文学』第5号, pp. 19-24.
- 服部宇之吉 (1892a) 「原始信仰ノ梗概」反省会『反省会雑誌』第7巻第2号, pp. 25-27.

- 服部宇之吉 (1892b) 「希臘哲学即古代哲学 (紀元前六百年より紀元六百年に至る)」反省会『反省会雑誌』, 第7巻第1号, pp. 12-13.
- 服部宇之吉 (1896a) 「墨子年代考 (承前)」哲学会『哲学会雑誌』第11巻第111号, pp. 384-392.
- 服部宇之吉 (1896b) 「荀子年代考」哲学会『哲学会雑誌』第11巻第117号, pp. 907-915.
- 服部宇之吉 (1896c) 『倫理学: 全』金港堂書籍, 国立国会図書館近代デジタルライブラリー: <http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/758533>
- 服部宇之吉 (1897) 「習字に就きて」帝国教育会『教育公報』第187号, pp. 16-20.
- 服部宇之吉 (1899a) 「孟子闢異端弁」『東洋哲学』第6編第2号, pp. 66-71.
- 服部宇之吉 (1899b) 『倫理学: 全』金港堂書籍, Google Books (慶應義塾大学図書館蔵): <http://books.google.com/books?vid=KEI010810616548>
- 服部宇之吉 (1899c) 『論理学教科書』, 富山房, 国立国会図書館近代デジタルライブラリー: <http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/753118>
- 服部宇之吉 (1904a) 「清国の教育に就いて」『教育公報』第186号, pp. 13-17.
- 服部宇之吉 (1904b) 『論理学講義』富山房, 国立国会図書館近代デジタルライブラリー: <http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/753134>
- 服部宇之吉 (1905) 『心理学講義』東亜公司, 国立国会図書館近代デジタルライブラリー: <http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/759752>
- 服部宇之吉 (1917) 『孔子及孔子教』明治出版社, 国立国会図書館近代デジタルライブラリー: <http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/954035>
- 服部宇之吉 (1936) 「服部先生自叙」服部先生古稀祝賀記念論文集刊行会編『服部先生古稀記念論文集』富山房, pp. 1-32.
- 服部宇之吉 (1938) 『新修東洋倫理綱要』同文書院.
- 林述斎原編, 高柳光寿・岡山泰四・斎木一馬編集顧問 (1965) 『新訂寛政重修諸家譜 十七』, 続群書類従完成会.
- 哲学会 (1899) 「留学生を送る」哲学会『哲学雑誌』第14巻第150号, p. 654-655.
- 町田三郎 (1998) 『明治の漢学者たち』, 研文出版.
- 松本文三郎 (1898) 「支那哲学に就いて」哲学館『東洋哲学』第5編第4号及び第5号, pp. 169-172.
- 三浦叶 (1998) 『明治の漢学』汲古書院.
- 森銑三, 野間光辰, 中村幸彦, 朝倉治彦編 (1980) 『随筆百花苑 第二巻』中央公論社.
- 柳生四郎 (1977-1978) 「外山正一の日記 (五)」同 (二十一) 東京大学出版会『UP』第54-72号.
- 李梁 (1993) 『近代日本中国におけるポリティックスとアカデミズム-服部宇之吉と近代日本中国学-』富士ゼロックス小林節太郎記念基金.